

今日の演題は「見直そう、日本の子育て」ということですが、私は30年前にアメリカ人と結婚して日米の狭間で3人の娘を育ててきました。長女が3ヶ月の時にアメリカの大学に入学し、その後3人の子育てをしながら大学院と進んで、院では心理学を勉強したのですが、そこで気づいたのは、色々なアメリカの心理学の先生方が子育てはこうしたら良い、と言っていることの多くが日本人が昔からしてきた子育てに通じるのではないかということです。心理学に頼らなくても、日本の先人たちはどんなふう子育てをしたらいいのか、長い歴史の中でそれを受け継ぎ実行してきたからこそ、こんなすばらしい国や国民性を築くことができたのではないかと思います。戦後、国際化や西洋化の流れで、日本の良い面が次々に壊され「何でもあれ」の子育てになってしまいました。その挙句、毎日のように暗いニュースを耳にするようになりました。このままではいけない、手遅れになる前に昔の日本を取り戻さなければいけない、こう痛切に感じています。今日はアメリカでの研究を紹介しながら、日本のすばらしい子育てを取り戻す方法を再認識できればいいなと思っています。

本題に入る前にアメリカに住んでびっくりしたことを少しお話ししたいと思います。私は3人の娘のうち末っ子をアメリカの病院で出産しましたが、アメリカの病院では出産後二日で退院させられます。（ちなみに、二月末に娘がカリフォルニアで出産しましたが、その時にかかった入院費用は二日で150万でした。日本に生まれて良かった・・・・）二日の退院にもびっくりしましたが、アメリカでは退院したその日から、生後2～3日の新生児を夫婦の寝室とは別の部屋でたった一人で寝かせます。アメリカの赤ちゃんは本当に可哀想です。ほかに驚いたことと言えば、日本では子供が生まれたらなんでも子供中心にしますが、アメリカでは子供を子守に預けてけっこう夫婦二人だけで遊びにでかけたりします。そうやって夫婦二人だけの時間を作って朝から晩まで「I love you」って言っているのに気がついたら離婚なんてこともざらです。こうしたことから、私は、概して日本が子供中心の社会ならアメリカはどちらかというと夫婦や大人中心の社会なんじゃないか、という印象を受けました。

こうした習慣の違いは一体どこからきたのでしょうか。ひとつには家族制度の違いから生じたのではないかと思います。家族制度の違いで典型的なのが、アメリカでは家族といえば、今一緒に暮らす家族、それにせいぜい祖父母を含むくらいで、日本のように先祖代々のご先祖様も含めて家族という考え方はあまりありません。何代も続いた日本の家では、こうしたご先祖様の供養をし、墓守をし、家を守っていくための子孫を残すことも大切な夫婦の務めと考えられてきました。だから、この家族を継承する子供たちを大切に立派に育てなければいけない。それで小さな子供をおいて夫婦二人の時間を楽しむといった考えも生まれなかったのではないかと思います。しかし今の日本はどうでしょう。子供たちを延長保育に預けてカラオケに行くような母親も珍しくないと言っていました。それに、2世代3世代が同居するといった大家族もだんだんと姿を消し、先祖に責任をもち家の繁栄のために子孫を残すといった考えも廃れてきています。その挙句、今や家族制度さえもその存続が危ぶまれる状態です。日本の子育てを取り戻すということは、この伝統的な日本の家族制度自体をも取り戻すことにつながると思っています。

私はこの先祖を大切にするという日本の家族制度は子育てにとっても非常に大切なことだと思います。昔から「仏壇のある家の子供に悪い子はいない」と言われてきましたが、これを裏付けるのではないかとと思われるような研究結果がアメリカで10年ほど前に発表されました。アメリカで健全な社会と家族を取り戻すために活動している「アメリカ価値研究所」というシンクタンクがニューヨークにあります。この研究所が2003年に出した研究に「人間には生まれながらに関係や結びつき、つながりを求める性格がある」（英語のタイトルはHardwired to connectです）という研究があります。そしてこのつながりに

は二つあり、一つ目は人とのつながり、二つ目は精神的な自分を超越した何かとのつながりである、と言っています。

人とのつながりはもともと親兄弟や祖父母といった家族、社会においては地域の人たちやそのほかの集団の中でのつながりです。二つ目の精神的なつながり、自分を超越した何かとのつながりとは一体何でしょう。アメリカのようなキリスト教の社会では神とのつながりがこれに当たります。日本のように神道や仏教国では神仏のほかに自然や先祖に対する畏敬の念をもつこともこれに当たるのではないのでしょうか。

日本の伝統的な家族にはこの二つのつながりが自然な形で備わっていました。家では多くの家族に囲まれ、地域とのつながりも強く、各家庭には仏壇や神棚がありました。しかし、核家族化が進み地域とのつながりが薄くなり、子供は人とのつながりより機械相手にゲームをして時間を過ごすようになり、家から仏壇や神棚が消えていきました。それにつれて子供たちや社会が急速に病んできました。人はたとえ悩みを抱えていても周りにそれを聞いてくれる人がいるだけで悩みの80%は解決されると言います。また、人は生まれながらに「なぜ自分は生まれたのか」「人生の目的は何なのか」「死んだらどうなのか」こういった究極の問いかけをする性格があるとされます。それゆえ、自分を超越した何かとの精神的なつながりを築くことで目に見えない世の中の秩序を自覚できるようになり、こうした問いかけに答えがだせると調査は言っています。

今アメリカでは四人に一人が精神病で苦しんでいると言われていますが、人とのつながりや自分を超越した何かを信じることには大きな心理的なメリットがあり、こうしたつながりを持つことができる人は、寂しさを克服し、危険な行動を回避し、他人への思いやりがあり、人生における意味や目的を自覚できると言います。こうしたつながりをもつことで子供が抱える多くの問題は解決できると調査は結論付け手います。日本も手遅れになる前に人とのつながりを取り戻し、神仏や先祖に手を合わせるといった昔ながらの習慣を取り戻す必要があるのではないのでしょうか。

神仏に手を合わせたり先祖を大切にすることは、暗黙のうちに子供たちに世の中にや秩序があることを教え、それゆえ心理的なメリットがあるというわけですが、さらにもう一つアメリカでは面白い調査結果があります。それは、人格に異常があつて犯罪を犯す人には共通する性格があるとされ、こういう人たちは今の自分の行動が将来どんな結果を及ぼすか考えられない、すなわち、刹那刹那に生きて時間的経過にたつて物事が考えられないと言われていています。家に仏壇があつたりお墓参りをしたりして常日頃ご先祖様に手を合わす習慣があるということは、自分は親の子であり、その前には永遠と続く先祖があつて自分が生まれた、こういった時間的経過を自然に自覚することができ刹那的な生き方をしなくなる、だから日本では犯罪が少なかったのではないかと私は思っています。でも最近では、歳を取っても子供に面倒をかけたたくないとか、子供に先祖を託すといった考えが段々と廃れてきていますが、こうしたことを教えないということは子供にとっても非常に不幸なことです。

子供たちにとって、この、人とのつながりや神仏や先祖に手を合わす習慣、この二つを取り戻す必要があると言いましたが、実はもう一つ取り戻すべきものが今の日本にあります。それは歴史です。国の歴史も取り戻さないといけません。価値研究所の調査結果も人とのつながりの重要な一面には「思い出の共有」があり、それは今生きている人だけでなく死んだ人も含まれ、こうした思い出を共有することで国の歴史の中で何があつたのかを知ることができ、自分がどこから来て、なぜ今の自分があるのかが分かり、アイデンティティーが深まる、と言っています。アイデンティティーが自尊心や自信につながることから、私たちはもっともって先人たちの人生に触れ、先人たちとの思い出を共有し、そこから生き方を学ぶべきです。

私は長女が三ヶ月の時にアメリカの大学に入って子育てをしながら学士と修士を取りましたので、子供が小さい時などは子供が寝てる隙をみては勉強していました。でも子供は大人の都合に合わせて寝られません。昼寝しないときなどどうやって勉強する時間をつくろうかと悩んで思いついたのが二宮金次郎です。二宮金次郎は薪を背負って勉強したんだから、私は子供を背負って勉強すればいいんだと思って子供を背負って勉強を始めました。昔のお母さん方はみんなこうやって家事をしたんだから自分にもできるだろうと軽い気持ちで始めたのですが、五分もすると肩が凝ってとてもじゃないけど続けられませんでした。つくづく昔のお母さんは偉いなあと痛感しました。この話を長女が高校生のときしたのですが、娘の返事は「二宮金次郎って誰？」でした。長女の場合、小中学校と沖縄で育ち、学校に二宮金次郎の銅像もなかったのも無理もないかもしれませんが、最近では本土でも二宮金次郎の銅像を建てない学校が多くなっているという話も聞きました。非常に残念なことだと思います。

安倍政権になって、また道徳教育を復活させよう、日本史を必修科目にしよう、という動きがあるのは本当に素晴らしいことです。日本の立派な先輩や偉人たちの話しを子供たちにもっともっと学校でも教えて欲しいし、私も教えてあげればよかったと悔やまれます。そうした先人たちの話が間接的に子供たちの生きる勇気につながり、日本人としてのアイデンティティーが確立されることを大人たちは実感すべきです。反対する人の中には「価値観の押し付けはよくない」とバカみたいなことをいう人もいますが、大人が子供に価値観を教えないで一体誰が教えるのでしょうか。地域には地域の価値観、日本人には日本人の価値観があります。それをちゃんと教えるからこそ、その地域や国に貢献できる人物を育てることができるのではないのでしょうか。

アメリカの哲学博士でクリスティナ・ソマーズという人がこんなことを言っています。「子供たちに価値観を教えないということは、実験の仕方も知らない子供たちに化学の実験室で自分の好きなように実験してごらんとやっているに等しい。大爆発を起こすのは時間の問題だ。」今、日本のあちこちでこの爆発が起きています。

それでは一体、こうしたつながりの喪失で病んできている子供たちを救うにはどうしたらいいのでしょうか。調査では「権威ある社会を作ることであり、権威ある社会を作るには権威ある家庭や親を作らなければいけない」と結論づけています。そして権威ある親とは「愛情にあふれて温かく子供を養育する一方で、厳しく子供を指導でき、子供を抑制でき、子供がすべきことをちゃんと教えられる親である」と定義しています。

昔の日本の家族が機能していたのは、子供たちを大切に育てる一方でそこには厳しさもあり、家族の一員としての義務や子供としてすべきこともちゃんと教えてきたからではないのでしょうか。愛情一杯の母親に厳しい父親、どこにでもいたこうした親が戦後日本ではすっかり影を潜めてしまいました。母親は単なる「甘やかし」を愛情と勘違いし、厳しい父親もあまり見かけなくなりました。

権威ある親は子供を抑制し我慢を教えることができる親ですが、最近はいかにこの我慢することを教えない親が多過ぎます。去年、夜遅く花火を見て帰っていた中学生が殺されたり、付き合っていた人にストーカーされて高校生が殺されるという悲しい事件がありました。大変気の毒なことではありますが、親はどうしてそんな遅い時間まで友達同士で中学生を外出させるのでしょうか。どうして高校生の娘にFBで友達になったような見知らぬ男性と付き合ったりさせるのでしょうか。正当な理由がない限り、我が家の門限は8時でした。子供に携帯電話を買ったこともありません。学生には必要ないからです。パソコンも家に一台あったパソコンをみんなで共有していました。個別の部屋というものもありませんでした。子供には何が必要で何が必要でないのかははっきり伝え、我慢できる心を培う必要があります。

今の日本の子育ての元凶がこの愛情と厳しさの喪失ですが、愛情の喪失の最たるものが「待機児童」ではないかと思われて仕方ありません。「待機児童」って字だけ見ると、機会を待っている子供という意味ですが、これってどんな機会を待っているのでしょうか。私に言わせると、親に育児放棄される機会を待っている可哀想な子供にしか思えません。お母さん方の中には色々な家庭の事情で働かざるをえないお母さん方もいらっしゃいますので、私は全ての母親は家にいて子育てをすべきだなどと言うつもりは毛頭ありませんし、女性が自分の能力を發揮して社会進出して仕事に生き甲斐を見出すのも悪いこととは思っていません。しかし問題は、小さい乳幼児と仕事を天秤にかけて仕事を選ぶお母さん方の考え方です。私の友人も言っていたのですが、幼稚園や保育園に子供を預ける母親の多くは「お金を稼いで贅沢をしたい」とか「子育てするより働いている方が楽だから共働きをしている」といった母親も多いそうです。もしそうだとしたら、そんな家庭で親子の絆が築けるのか疑問です。

去年九月の厚生労働省の発表では現在ゼロ歳児の保育園利用者が11万2千人で大体10人に1人、二歳児までに82万8千人で4人に1人が園に預けられています。今年の1月31日に発表された別の統計では、去年1年に報告のあった全治30日以上の子育て施設での事故は162件でそのうち死亡は19件、死亡はいずれもゼロ歳から二歳児までの乳幼児です。

私は三人の娘を育てましたが、一度も保育園に入れたことがありません。ちなみに塾に行かせたこともありません。末の娘が小学校の高学年になって今の仕事を始めて、主人が帰宅した後2〜3時間家を空けるまで共働きをしたこともありません。決して主人が高給取りだったわけではなく、子育て以上に大切な仕事があるとは思えなかったからです。生まれて一歳にも満たない我が子を園に預けてまでするような仕事って一体何なのか、本当に不思議で仕方ありません。多分にかこうしたお母さん方は、食事を与えて大きくさせるのが子育てだと勘違いされているのではないかと思います。子育てとは身体を育てる以上に心を育て、生きる力を育むことではないでしょうか。

乳児の時でもお乳を飲ませておしめを換えるだけが母親の務めではありません。知能指数という言葉がありますが、この知能指数よりもっと大切なものに感情指数があるという提唱をしてベストセラーになった本を書いた Daniel Goleman という心理学者がいますが、彼はこういうことを言っています。「乳幼児がほかの子供が泣くのを聞いて泣き出すのは、子供には生まれながらにして人に同情する気持ちが備わっているからだ。しかし、こうした乳児も自分が笑ったり泣いたりした時にその感情に反応してくれる人がいないと、自分の感情には意味がないと思って感情をなくしてしまう。」お乳を与えたりおしめを換えたりすることも大切ですが、それ以上に大切なのは一緒にいて子供の感情に添ってあげることです。こうすることによって初めて子供の心は育つのです。価値研究所の調査も「我々の脳は、言葉を発する前からの人との感情的対話によって発達する」と言っています。

もう一つ乳幼児の成長で欠かせないことで心理学者が提唱しているのが「愛着の構築」です。「子供は三歳になるまでに一人の大人としっかりした愛着関係が構築できないとその後の発達に障害がでる」と言われています。日本で昔から言われた「三つ子の魂百まで」という言葉は非常に真理を突いた言葉だと言えます。三歳になるまでにしっかりした愛着が構築できた子供は、自分の周りの世界は信頼できるという安心感を持ち、この安心感ゆえにその後大きくなるにつれて自信をもって社会に踏み出していけるのです。厚生労働省の調査では三歳児までに4人に1人が園に預けられていると報じていますが、園と家をたらいまわしにされてはたしてしっかりした愛着が構築できるのか疑問です。

「愛着関係の構築」の大切さの理由をもう一つ付け加えると、親子の間に愛着関係の構築があるからこそ子供は親の嫌がることをしなくなり親を喜ばそうと努力し、その過程で道徳心が芽生えるとも言えます。小さい時の親子関係がしっかりしていないと子供の道徳心も育ちにくいということです。いじめ問

題を解決しようと思ったら学校にばかり責任を押し付けるのではなく、小さい時の親子関係を見直すことです。可愛い我が子が生まれたら、一緒に添い寝してあげてください。笑ったら笑い返してあげてください。泣いている時には一緒に悲しんであげてください。そして思いっきり抱いてあげて愛情をかけてください。赤ちゃんは言葉は発せなくてもちゃんと感情を持って生まれてきます。その感情を生かすも殺すも周りの大人次第だということを忘れないで欲しいと思います。

最後に、愛情同様に大切な厳しさに関して心理学者が提唱している躰の基本の一つを紹介します。それは、子供には「自分の行動の結果を常に体験させよ」ということです。朝寝坊した子供を決して学校まで車で送ったりしないでください。忘れ物をしてもし決して学校に届けたりしないでください。朝寝坊したり忘れ物をした行動の結果、学校に遅刻したり先生に叱られたりして嫌な思いをしてはじめて、子供たちは嫌な思いをしたくないから次からそうしたことをしない努力をします。悪い行動の結果としては悪い体験をさせるべきですが、いつまでも親が子供の尻拭いをしていたのでは、子供からそうした学習のチャンスを取っていることになります。

そして、可愛い子供には旅をさせてください。私は長女が大学に進学する時、当然何百万もの授業料を払う金銭的なゆとりはありませんでしたので、「お金はないから出せないけど、知恵は出せるよ」と言って、奨学金がもらえる手続きをしてお金があっても大学に行ける方法を教えて、アメリカに一人旅立たせました。その後彼女は大学を卒業した後、自分で学士ローンを組んで大学院に行き、今は国連の翻訳をしています。お金や物では子供は立派に育ちません。幸せを買うこともできません。親にとっての幸せは子供が立派に成長するのを見守り、その命が次の世代にバトンタッチされるのを見届けることではないでしょうか。長女はもうすぐ母親になります。（二月二十五日に無事出産しました。）

男女共同参画が推進されてからなんでもありの家族になって、母親が家庭から職場に出ることがいかにもすばらしいことであるかのように吹聴されてきましたが、時代が変わっても変わらないのは、赤ちゃんや幼児にとって親が傍にいて愛情を一杯に注いであげ、そして少し大きくなったら厳しさをもって子育てをして社会に送り出していくことです。今一度、昔のお母さんやお父さんが普通にしてきた子育ての原点に戻る必要があるのではないかと思います。

私の自宅の近くに大津島という島があります。戦時中回天の訓練基地があったところです。去年の12月8日の産経新聞にその記念館にある一通の遺書が紹介されてありました。それは「お母さん、私はあと3時間で祖国のために散っていきます」という文章で始まり、こう締めくくられてありました。「お母さん、今日私が戦死したからといってどうか涙だけは耐えてくださいね。でもやっぱりだめだろうな。お母さんは優しい人だったから。お母さん、私はどんな敵だってこわくはありません。私が一番怖いのは、母さんの涙です。」吉田松陰もそうでしたが、死ぬことよりも母親の悲しみの方が怖いと言わず母親の愛情って本当にすごいものだと思います。日本が戦時中あれほど強かったのは、家族の絆が強かったから多くの若者が親兄弟のために散っていったからではないでしょうか。家族が弱体化すれば当然国力も弱まります。今一度、昔ながらの家族の絆を取り戻しましょう。みんなで伝統的家族や昔ながらの子育てを復活させましょう。